

あざしらの集い

イエスとは何か

(2)

〇七・九・二三〜二四

イエスとは何か（本論）

★キ―ワード―

神の支配の働き。

創造に於ける人間の自然。

相互内在。

神の大いなる命のたぎり。

エン・クリスト。

クリスト・エン。

一即多・多即一。

天然自然。

限界点即自由。

大決定。

場所論的神理解。

神秘・奥義・秘儀・秘密。

自然法爾。

統一化。

イエスとは何か

松下昌義

本年六月九日「ミニニあごらの集い」を左京キリスト教会で開催いたしました。その時私が提示しました主題は「イエスとは何か」ということです。当日は時間の都合で、序論的なお話しができず、本論については本日の「あごらの集い」に持ち越すことになりました。したがって、今回の集いにおいては前回の序論のつづきとして、本論の部分を語らせていただきます。

申すまでもなく、私は神学者でもなく、聖書学者でもございませんので、「イエスとは何か」という主題のもとで、それに付いて神学論や聖書学的な立場からの専門的なイエス・キリスト論を展開する器量はございません。

私は、青年時代に新約聖書と、その福音を説く榎本保郎という宗教性豊かな牧師を通してイエスに出会い、ご縁のある教友と共に、イエスの弟子の一人として求道して参った者です。その求道に於いて私自身が開眼直覚させていただいたイエスが証示した命のリアリティーを、少し語らせていただき、そのリアリティーをこの集いで皆様方と分かち合う事ができればと願っております。

今回の集いは、時間に少し余裕があり、また、日頃お会い出来ない遠方からの方々もおいでなので、私自身も皆様方からそれぞれの求道の賜物を分けていただくことが出来ればまことに嬉しく存じます。宜しくお願い致します。

尚、先に話しました序論の最後で大切な部分のまとめをしておきましたが、そのころを再確認していただければありがたいと思います。

イエスは「神の支配」を行じ証示した

それにいたしましたも、「イエスとは何か」について結論を先取りして申しますなら、「イエス」とは「神の支配」の働き、即ち「キリスト」に開眼し、その働きへキリストをみずからの全存在で行じ、それを証示なさったお人だといえます。その意味で「イエスはキリスト」なのであります。

《「神の支配」がなぜ「キリスト」なのかと言うことについては、「イエスとは何か」というイエス・キリスト論にとって大切な基本的課題です。以下の語りで次第に理解していただけるようになると思います。ここでは、ヨハネ福音書一章一節〜十四節の「神の先在のロゴス（言葉）の受肉したか形が、イエスの真の主体として創造的に働く神の大いなる命のこと、即ち「神の支配」をパウロはキリストと称したのです。》

「神の支配」という言葉は日本語訳の聖書では「神の国」（マタイでは「天の国」）と訳されていますが、新約聖書の原語では「神の支配」という意味であると、ドイツの聖書考古学者ダルマン（一八五五〜一九四一）の研究以来それが認められているようです。

《彼はパレスチナのドイツ考古学研究所の所長を勤め、第一世紀のユダヤ教の原語、思想、慣習等を研究しイエスの日常語がギリシャ語でなくアラム語であったことを発表した。》

たしかに、イエスが「神の国」について語られる場合、「神の支配」と言うほうが理解

し易いと思います。勿論、神の支配が歴史の中で完結したかたち、即ち終末論的には「神の国」なのですが、その働きを言い表す場合には「神の支配」のほうが的確ではないかと思えます。例えば、マルコ福音書四章二十六節以下にある「成長する種」のたとえ話の場合などその一例です。

また、イエスは言われた。「神の国（神の支配）は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時がきたからである。

—マルコ福音書四章二十六節—二十九節—

イエスにとって、「神の支配の働き」は、観念的な幻想の世界のことではなく、まさに私たちの却下、否、わが内と外に躍動している現実的な事実だったのです。ですから、イエスはユダヤ教の熱烈律法主義のセンセイ達との論議のなかで次のように語られた。

パリサイ宗の人々が、神の国（神の支配）はいっ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国（神の支配）は見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と客観的に論じるものでもない。実に、神の国（神の支配）は、あなたがたの真っ只中（*イント*）に〈創造的に躍動して〉あるのだ」

—ルカ福音書十七章二十節以下—

私が神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の支配はあなたたちのところに来て（現実となっている）。
——ルカによる福音書十一章二十節——

「神の支配の働き」は宗教的な教義概念ではない。単なる教えでもない。聖書に書いてあるから正しい教えなのでもない。ましてや客観的に対象化して見えるものでもない。イエスにとって「神の支配の働き」は、聖書に記されてあるうがなかるうが、ユダヤ教の信仰の大先輩モーセ先生が、旧約聖書で語ったか否かに関係なく、世界内の何ものにも依存することなく、それらを超越して、天の大決定として元始めから創造的にたぎっている大いなる命のリアリテイ——その事が事実としてそうなのだから、そうなのです、と証示されただけのことです。

ですから、イエスは言われる。『人が土に種を蒔いて夜昼寝起きしているうちに、種は芽を出し、ぐいぐいと成長してゆく大いなる命のたぎりその事なのだ！』と。『人はどうしてそうなるのかまったく知らない』つまり、人の計らひとは関係なく「ひとりで」（アウトマテイ——それ自身に於いて、超越的に『必ず、そのように成る大決定その事』なのです、と。その意味で「神の支配の働き」は、創造的な大いなる命のたぎりその事（リアリテイ——）なのです。そのリアリテイ——を私は『創造に於ける自然』と申しております。それは、今ここに躍動し働いている超越的な大いなる命の秘儀です。ですから、それは最も畏怖すべきことであり、且つ、一方的な恩恵として崇敬すべき命のリアリテイ——と言えるでしょう。（マタイ一〇・二八）

この神の支配の根源的な且つ究極的な支えと「働きの場」を欠いたままで、花が咲き花が散り、鳥が空を飛び、空から落ちることはない。私たちの頭の毛一本といえども抜け落ちることはないのだ、とイエスは言われた。(マタイ六・二五以下) この神の支配の働きの現場が、私の命の究極の根柢、私の命の主体である「ことを直覚させられることを「信仰」というのです。

二羽の雀が一アサリオン(二百円)で売られているではないか、だが、その一羽さえ、あなた方の父(神)なしには落ちることはない。

マタイ福音書一〇章二九節―

新共同訳では「父の許しが必要ならば」と訳していますが、直訳すれば「父(神)なしに」ということであり、その意味内容は、「父(神)の関与なしには」ということであるとすゝる訳があるが(八木)、そのほうがイエスの信仰にかなっており、無理がないようにおもいます。彼は言う。「しかし、それは神が雀を殺す、ということではない。雀が殺される、ないしは、死ぬのを「許す」のでもない。生物は死ぬように創造されている。イエスは人間が死ぬのはその罪のせいだ(創世記三・一七―一九。ローマ五・一二―一四)と考えてはいなかったと解釈できる」と。つまり、「生物の死という自然の過程にイエスは神の支配の関与をみていた」。

たしかに、神が全能であるという教理から見ると、神が殺し、神が生かすのだ理解したくなる。しかし、そのような現実への神の直接性を「神の全能」と解釈するなら、人間の知恵のはからいと神の直接性との関係にさまざまな矛盾が出てくる。何処からが神の直接

性であり、また、どこまでが人間の知恵のはからいなのか、その境界が判別出なくなり結局、人間と神との関係の混同が生じ、すべての判断は、自我の都合、個々の人間の主観的な判断になってしまう。

このことは、「神の支配」と「人間の判断」、つまり「人間と神との原関係」という実存論的（存在論的）な根本問題を含んでいるといえます。そこで、このことについて、もう少し踏み込んでイエスとパウロの信仰を通して考えてみようと思います。

私たち人間は、考える動物です。考えるということを少し綿密に言うなら、それは「思惟」できるということです。つまり、感覚や知覚を働かせ対象をしっかりと知り、さまざまに人生の問題を解決する能力、即ち「思考能力」だけではなく、言語を用いて概念化し判断、推理をおこない、物事の本質的、且つ普遍的なものを深く知る事が出来る思惟能力をもっているのが人間です。このように考え、思索する働きを統一するその働きをしている当体（主体）を「自我」というのです。その自我を、具体的に言うとして「私が私である」と意識し自覚している主体（自分）です。ですから「自我」は、私という存在の「しるし」であって、とても大切なものです。「私」という存在は自我なくしてはあり得ないのです。ところが、そのような能力を持っているゆえに、「私は、私によって、私である」と、思ひ上がりをした「自我」に変わってしまう。そのような自我を「歪んだ自我」とわたしは称しています。

このような「歪んだ自我」が私の主人となって、私がわたしと関わり（自己と自我との

関係)、また、私が私たちと関わる(自我と社会との関係)とき、さらに、私と他者と関わる(自我と他我との関係)とき、とても困った問題が起こってくるのです。それは、自分中心主義、人間中心主義という問題です。まさに人生に於ける問題のすべての原因は、この自分中心、人間中心という「歪んだ自我」による「関わり」の中で日常的にどの人に於いても、どの場所でも、どの時代にも起こって来たし、起こっており、起こってゆくのです。

結局問題はどこにあるのでしょうか。どうやら問題は歪んだ自我にあるようです。そして特に、「自分自身が自分にどのように関わるか」ということに集約されるのではないのでしょうか。つまり、人生にとって一大事とは自分以外の何かにあるのではなく「私自身」にあるのです。《ここで思い出すのはキエルケゴールの「死に至る病の」の冒頭の言葉です。「人間とは精神である。精神とは何であるか? 精神とは自己である。自己とはなにであるか?、自己とは自己自身に関係するところの関係である……」》 当時十六歳の私にはこの言葉が理解できず何十回も読み返し、それ以上読み進む事が出来ず苦しんだことを懐かしく想いいたします。

問題は「私自身にある」とは、結局、「自我」の在り方にあるということです。この事を理解する助けになると思われる新約聖書の「ヤコブの手紙」に注目しておきましょう。この手紙は、紀元一二〇年以降に書かれたもので、贖罪信仰を中心にした福音理解、つまり、パウロの「信仰による救い」ではなく「行いによる救い」を説くかのようにヤコブ書を見たマルチン・ルターは、この書を「わらの書」だと言って重要視しませんでした。

たしかにその内容は一見、律法主義的、且つ倫理的な面が強調されているからでしょう。しかし、よくよく読んでみますと、とても大切な事が記されてあります。なぜなら、そこでは自我の在り方を厳しく問うているからです。次の一節もその一つです。

何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いが起こるのですか。あなたがた自身の内部で争いあう欲望が、その原因ではありませんか。あなたがたは、欲しても得られず、人を殺します。また、熱望しても手に入れる事が出来ず、争ったり戦ったりします。

得られないのは、願ひ求めないからで、願ひ求めても与えられないのは、自分の樂しのために使おうと、間違つた動機で願ひ求めるからです。神に背いた者たち、世の友となることが、神の敵となることだとは知らないのか。世の友となりたいと願う人はだれでも、神の敵となるのです。それとも、聖書に次のように書かれているのは意味が無いと思うのですか。神は私たちの内に住まわせた靈を、妬むほどに深く愛しておられ、もっと豊かな恵みをくださる。……

—ヤコブの手紙四章一節—六節—

ヤコブの手紙は五章（108節）から成り立っており、そのうち五十四節は命令形をとって勧めているので、一見「……であれ。……をしてはだめだ！」と言う、所謂「律法主義的教訓訓集」のように、先に申しましたように受け取られてしまったようです。しかし、ヤコブの手紙の真意は当時の信徒がイエス・キリストによって罪を赦されたのだから、何をしてかまわない“という自分勝手な贖罪信仰の觀念化（自我による福音理解）に陥り、

それに対する反省を説き、贖罪信仰に促されおのずと生じてくる。善き行い“を語ったものであります。それは結局、自我によって抱え込む信仰の落とし穴“についての警告だと
言えます。《本講話の主題の一つはこの点にあることを知っておいて下さい》

尚、ヤコブの手紙についてはいつかゆっくりとご一緒に学ぶ時が与えられればと、願っています。

「自我」とは、とても歪み易いものです。それは、先にも述べましたとおり、私たちの主体として知恵や感性や意志を働かせ統一するものだからです。「我れ思う、ゆえに、我れ在り」とは、人間の精神は世界から独立した、純粹知性（理性）として確立されるとする十七世紀の啓蒙主義時代の幕開けとしてのルネ・デカルト（一五九六―一六五〇）の有名な言葉です。この言葉については、いろいろと研究者が論じられていますが、凡人の私は、彼にとって「我れ思う」とは人間理性の働きのであり、理性的主体が「我れ在り」の根拠だとする自己認識、人間理解の命題なのではないかと単純に思っているのですが……。

それは、まさにヨーロッパのルネッサンスの標語である「理性の灯火を高く掲げよ」の人間の知性への賛美の声と同じだと思っております。そして、人間の知性（理性）をもって人間の歴史を切り開き構築し、ついに、絶対的幸福と平和とを生み出されるという確信の宣言だったのでないでしょうか。

このように近代の出発は人間が、神に代わって、世界の外に越え出た独立した主体者“として君臨することによって、世界を自分に対してあるもの、世界を認識の対象として考え支配する事ができるということであり、それは自然的な世界の徹底した機械化であり、知

的主体としての人間性の確立宣言だったのです。つまり、人間自我が神となり、人間が万物の霊長となったのである。

「自分の都合だけで自分の生き方を決定し、選り取ってゆく」完全な自律的自我と人間はなったのです。たしかに、それは歴史的に中世ヨーロッパに於けるキリスト教会の宗教的、神学的ドクマによる強権的且つ独善的な他律に対する反動としての人間の開放だと言えるでしょう。しかし、その神を失った人間中心主義の自我高揚の結果が、人間を虚無（ニヒリズム）へ導く最初の一步になったのです。結果は二十世紀においていっそうに明確になりました。近代合理主義の行き詰まりです。そして人類は地球規模の存亡の危機を今日迎えています。その元凶は、つまるところ、人間の自我高揚による、真の意味での神を見失ったことにあると言えましょう。それは、「神の支配」の消失です。

ここでコメントしておきたいことがあります。それは、ヨーロッパ中世に於ける「ローマ・カトリック教会」が「神の支配」に開眼し、その信仰を保持していたか、ということについて言うならば、個々の神学者や修道集団はともかく、その教会の在り方は明らかに、神を踏み台にした巨大な「宗教自我」に陥ち込み、それだけに最も醜い「悪魔的な独善的宗教権力統一集団」に成り下がっていたと思えます。神という最も神聖な名を掲げた、最も世俗的な人間権力集団だと言えましょう。それは、最も神に近いとされる人間が、最も神から遠い人間であるのと同じです。パウロは、最も神の前に義人であろうとして、神の律法（聖書の言葉）を遵守するユダヤ教熱烈信仰者集団のパリサイ派のセンセイ方に次

のように、過去に自分もそうであったことの反省を込めて、次のように彼らに言いました。

兄弟達よ。わたしは彼らが救われることを心から願ひ、神に祈っています。わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証ししますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものでありません。なせなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。

—ローマの信徒への手紙。一〇章二節、三節—

「神の義」とは、神の創造的な大なる命、つまり「神の支配の働き」のことです。そして、「自分の義」とは、自我が願望として描いた、願わしい信仰者の在り方のことです。結局、パリサイ宗の熱心な求道は、なんのことはない、自我で神を抱え込み、そこから造り出された信仰に、忠実に生きる信仰者に成ることだったのです。その実態は、驚くなかれ、自我が自我賛美をしていただけの事となります。これこそエゴイズムの極致なのです。イエスはその人間の在り方を「偽善」言われた。しかし、当のパリサイせんせいたちは、その偽善に気づいていないのです。ここに、彼らの決定的な「悲惨」がある。

しかし、一方、このような当時のローマ・カトリック教会に対して宗教改革を起こしたプロテスタント教会のその後はどうであったか、と問うとき「聖書原理」を掲げるそこに於いても「神の支配」に十分開眼がなされぬままに、現代の教会の行き詰まり現象に至っていることを、しっかりと見据えなければ、と思えます。「聖書原理」そのものを根っこのから問いなおす必要があるのではないかと思っています。

結局、問題は最初に申し上げましたとおり、「私がわたし（自我）にどのよにう関わるか」という「自我」の在り方にあります。以下では、パウロの場合と、イエスの場合に於ける自我について、ご一緒に考えてみることにしましょう。

先のヤコブの手紙は、「あなた方の内部で争いあう欲望が」諸悪の根源であると指摘します。おそらく、一見だれもが「その通りだ」と思いますし「あなたがたの内部の欲望」と言うとき、「欲望」という文字に引きつけられます。

あなたの「肉体の欲望・心の欲望」それが「罪」なのです！と、キリスト教会はその言葉のトーンをことさらに上げて人々に悔い改めを迫ります。それは一種の脅迫の暴力のように聞こえます。ある人は「そういうお前はどうかのだ！」とこころの中で切り返すでしょう。ある人は、その通りです。と素直に悔い改めるでしょう。しかし、一向に、悔い改めたわりには、欲望が無くならないので、もんもんとした思いで、祈り、悩み、ひそかに罪の意識を引きずりながら、すっきりとしないまま、日々を過ごす自分の偽善に、不安を感じているキリスト者が多くおいでだと思います。ある人は私に言いました「私はクリスチャンにならなければよかった！」と言ってその人は頭を深くうなだれました。

それにしても「欲望」その事が「罪」なのでしょう。はたして、欲望が罪なのだ、とイエスやパウロは語ったのでしょうか。そもそもイエスやパウロが言う「罪」とは何なのでしょう。

罪について誰よりも真剣に考え、対峙したのはパウロです。彼は言います。

私は肉の人であり、罪に売り渡されています。私は自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになりません。そして、そういう事を行っているのは、もはや私ではなく、私の中に住んでいる罪なのです。私は自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうとする意志はありませんが、それを実行出来ないからです。私は自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、私が望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはや私ではなく、私の中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、何時も悪が付きまわっているという法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があってこのころの法則と戦い、私を、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。私はなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、誰が私を救ってくれるでしょうか。私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。

——ローマの信徒への手紙七章一四節〜二五節——

パウロの罪理解は信仰的に深化して行きますが、キリスト者になる以前のユダヤ教パリサイ派の指導者としての彼の求道は、まさに激烈一途でした。彼はその頃の自分の求道について「私と同じ年代の多くの誰よりも熱烈であった。」そして「キリスト教会を壊滅す

べく狂気のごとく教会を迫害した」と告白しています。(ガラテヤ一・一四) 彼はそれほど熱烈「律法主義者」だったので。

律法主義者とは、聖書(律法)の文字を神の直接的言語と信じ、その言葉の一言一句遵守することで、神と人の前で義人として生きようとする人間のことで、神の律法に生きることが、神の御意にかなった人間の唯一の生き方であると確信し、自分の全存在をそのためにかけたのです。これがユダヤ教バリサイ派教徒としてのパウロの信仰だったので。したがって、その場合パウロにとっての「罪」とは「律法に違反すること」なのです。それは、「律法遵守は神にかなう義人、救い」「律法違反は神に反する罪人、滅び」という構図になります。

ところが、そのようなパウロに一大転機が訪れます。それがキリスト教徒狩りに行くダマスコ途上のキリスト顕現体験です。この顕現事件の解釈をめぐることは、さまざまな見解があります。拙著「わたしの問いつづけてきたこと―パウロの信仰」(みちしるべ文庫五五ページ)に私の理解を述べておきました。参照していただければと思います。

パウロのキリスト顕現体験について確認しておきたいことは、この劇的なキリストの顕現事件については使徒言行録九章一節〜九節・二二章と二六章に記されていますが、パウロ本人はその書簡の中で「神は、私の内に現された」としか語っていないのです。(ガラテヤ一・一六。コリントⅡ一五・八)

ここで顕現事件についてコメントしておきたいことは、それがどう言う出来事であったにせよ、「見たとか、現れたとか」いう出来事は、所詮はこの世界内の事、歴史内の事であ

あつて、その歴史内の出来事自体を唯一絶対の眞実として扱ひ所とすることは、相對の絶對化であり、幻想によりすがりよくなるようなものです。大切なことは、その出来事を通して証示されている大いなる命のリアリテイ、即ち「神の支配」に開眼することであると思ひます。「私が信ずる」ということではなく、私が完全に滅し、私が無になつたそこで、おのずと天（神）の側より現成してくる超越的な命の根柢・根拠（神の支配の働き）に「開眼させられる」ことです。ですからパウロは次のように言ひます。

私たちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ、見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続するのである。

—コリントⅡ四・一八—

それが、どのような手続きであつたにせよ、とにかくパウロはキリストの命の世界、創造的な大いなる命のたぎりの世界、神の支配の働きの世界、即ち超越的なキリストを、直接経験したのです。それを彼は「神が御こころのまま、御子（復活のキリスト）をわたしの内に現した」と言つたのです。（ガラテヤ一・十六）

その意味で、事件の現象を詳細に語ることによって、その見えない世界を説明納得させようとするよりも、言語が断たれた見えない世界を直接経験したその事を「神はわたしの内に現した」と告白する方が、はるかに事の内容が、そしてその経験者が受けたものの神秘的（宗教的）超越性が証示されるであらうし、同時に、それを謙虚に聞く者に深く伝わり、露になる。その事を禪的に言い換えるなら「言語道断直指人心」である。

では、直接経験後のパウロの生き方はどのようになったのでしょうか。おそらく彼は長い間、直接経験そのことに信仰的に深く深く思いめぐらし、やがてそこで自分に啓示された大いなる命の秘儀の何であったかが少しづつ霊的に彼自身の宗教的実存に浸透し、遂に露になっていったのではないかと思う。その結果、彼は最終的に次のように告白するので

生きているのは、もはや私ではありません。(復活)のキリストが私の内に生きておられるのです。私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のために身をささげられた神の子に対する信仰によるのです。

—ガラテヤの信徒への手紙二章二〇節—

パウロにとって、キリストとは、復活の霊的なキリストです。(コリントⅡ三・一七)したがって、復活のキリストとは、生死を超越した創造的な大いなる命の霊的なたぎりその事です。では、生死を超越したとはどういうことか、それは、生と死以前、つまり、未だ、生も無く死も無く、生と死を生み出す根拠であり、絶対無自体のリアリテイ—その事をいうのです。へそれは主客を越え、決して対象化出来ない動としての、究極の創造的な根拠であり、その根拠が、私を私としている私の主体なのだ!と、パウロは直覚し開眼させられたのです。その時、パウロの計らう自我は、自らの幻想性の故に自然に消えてしまった。消えるとは無くなるということではなく、「私」の主体として私を支配していた自我が無化されたということにあります。このことを「悔い改め」というのである。そのこ

を簡単に言えば「ああ、そうだったのか！ 私は間違っていた」という素直な思いです。その命のリアリテイ―がパウロ自身の存在をについて「生きているのは、もはや私ではありません。復活のキリスト（大いなる命・神の支配の働き）が私の内に生きておられるのです」と。それは真実の自己の開眼にはかなりません。まさにそのときの彼の境地は「自我の限界点即自由」ということでしょう。彼は、本来の命の大海原に開放されたのです。当の命の大海原が「本来的な自己」にほかなりません。この開眼に、万感の思いを込め、彼は歓喜して次のように叫んだ。た。

だれでもキリストの内にあるならば、その人は新しい創造された。古いものは過ぎ去った。見よ！、すべてが新しくなった。

―コリント人の信徒への手紙Ⅱ五章一七節―

ここで、パウロが開眼した「キリストが私の内に」と言うことと、「キリストに私がある」と言うことについての意味内容を了解しておくことは、パウロの信仰を理解するうえで、また私たちの宗教的実存への開眼のうえで、とても重要なことだと思つのでコメントしておきます。

「キリストが私の内に」とは「キリスト・エン」であり、「キリストに私がある」とは「エン・キリスト」です。これについて、八木誠一は特に注目し、適切な解説をされており、それに習って述べてみます。

「エン・クリスト」と言う場合の「エン」(in)とは、「空間的位置関係を表す前置詞は、信徒がいわばクリストに包まれ、クリストの働きの領域内に置かれていることを示す。そのような信徒とクリストとの関係を表すために『クリストにあって』といわれるのである」。したがって、信徒がクリストの中にある“という場合、「信徒はクリストに包まれている、支えられている、受け入れられている、恵まれている。クリストの働きの領域に置かれ、そこから恵みとしてさまざまな賜物を受ける、賜物としての本来的生がおのずと成り立ってくる。その結果、この表現は超越者が自己の存在の根柢であることを言い表すことになる。『恵みによって私はいまあるところの私である』(コリントⅠ、一五・一〇)と言うとき、神の恵み(これが私が『神の中』にあると言ひ換えられる)は、神が自己の存在の根柢・根拠であることを示す」

ですから、パウロは次のように言う。

このように、あなた方も自分たちが罪に対して死んだ(関係がなくなった)者、クリストにあって(エン・クリスト)、神に対して生きる(クリストが根拠となり生かされる)者であることを認めよ」

——ローマの信徒への手紙六章十一節——

一方「クリスト・エン」即ち「クリストが信徒の中にある」とは、どういふことなのでしょうか。パウロの直接経験による信仰告白で言えば「生きているのは、もはや私ではありません。クリストが私の内に生きておられる」(ガラテヤ二・二〇)ということです。

だが、これは「私とキリストとが同居している」という意味に理解してはならないでしょう。「同居している」とは、水と油のような質的に全く違ったもの同志がただ物理的に居るといふことになります。それならば、どこまでも別々なのです。つまり互いに全く関係が無く、ばらばらのままです。だといって、別々の二つのものが、一つになるということでもありません。質的に違う二人が、溶け合って一人になるとは、個としての存在が互いに消えてしまうことになります。では、「キリストが私の内に生きている」とはどう言う在り方なのでしょう。それは、「私がまさに私自身であること、即ち主体としての私の営み自身が、キリストの働基に基づいて成り立っている」ということです。それは、単に二つのものが一つに溶けて合一するという所謂「神秘主義的き合一」又は「グノーシス的神秘的融合」とは異なるものです。

使徒パウロの直接体験はそういう意味で、神秘的合一、つまり「人と神との一の体験」ではない。

ここでまた、少しコメントしておきますが。「クリスト・エン」についての神学的研究分野で、八木の視点で洞察する神学者は、世界的に少なく、言わば神秘的な表現だとしてキリスト教会では排除され重要視されない傾向がある、ようです。その理由は、次に述べることと関連があります。

プロテスタント神学の世界で二十世紀最大の神学者と称されたカール・バルト（一八八六―一九六八）が提唱した所謂「弁証法神学」が世界の教会や思想にも影響を及ぼしました。私が青年時代に日本の教会にも波及し、私のような神学に縁のない者でも、当時、次

々と出版される彼の翻訳本や解説書を、十分理解できないままに読んだ牧師や一部の信徒等が「カール・バルト。カール・バルト」と、お題目のように口にしたりしたほどでした。

《ただし、私が身を置いていた「キリストの教会派」立のセミナリーは、「神学」を悪魔の学問だと思い込んでいたので、誰一人バルト神学と言うことさえ知らずにいたようで、彼の書物を読む私は反聖書的と言う意味で、「キリストの教会派」には相応しくない危険な者のように思われていた事を、後で知り、驚きました》

このバルト神学の立場は「聖書が証するキリスト」だけが神の啓示であり、神と人とを媒介するものは「聖書が証するキリスト」への信仰だけである。そして聖書に基づき教会が語る言葉と教会で執行される聖餐と洗礼が重視されるだけ、ということでした。したがって、個人的な神秘主義の直接性は全く排除されてしまいました。勿論バルトの聖書主義的立場は、熱狂主義ではなく、また常識主義的聖書主義の立場でもありません。聖書が証示する神のリアリティーを深く、教会の学として神学する立場であるということ、啓蒙主義的合理主義哲学に抱え込まれようとしたキリスト教会が持つ福音を、復権したという意味で、バルト神学は大きく歴史的貢献をしたと、常識的なレベルで私は理解しています。

それにしても、「宗教」という事を深く問うとき、人間の知を越えた陰の部分、つまり神秘的超越性が深く潜んでいるところに「宗教性」があるのではと思います。此の部分を特定の宗教的ドグマで、また、特定の聖典を唯一絶対の真理とし、その枠内に宗教性を限定することは、この世の相対的な一つの文化が生み出した「宗教」で真理（神）一般を統一しようとすることは、排他的独善ではないかと思うのです。その結果は当然ハンチント

ンの言う如く「文明の衝突」が起こり、人類世界に混乱と争いをもたらすでしょう。ましてや、その善悪の評価はともかく、すべての面でグローバル化が進展し、加えて、近代合理主義的な知の転換が根本的に求められる現代後（ポストモダン）において、バルト的な立場が主役の座から一九六五年以後、降りてしまったのは歴史の必然だと思えます。その意味で、深い意味で「真の宗教性」が今日のキリスト教会に求められているのだと思うのです。

ところが一九六〇年代以後、物質文明の最も進んだ米国を先駆けにして、合理主義的な技術や産業社会の行き詰まりを打開しようとして対抗文化（カウンター・カルチャ）という文化潮流を生み出すことになり、その中で「西洋思想のもうひとつの正統」と言われる神祕主義の過去の伝統がよみがえって来た。その結果世界的に「神祕主義」が見直され、日本のキリスト教会の世界にも波及してまよりました。その一つの現れが「教文館」という日本のキリスト教の代表的な出版社である「教文館」から「キリスト教神祕主義著作集」や「神祕主義事典」といった書物等が出されるようになったのです。キリスト教会以外の今日の日本の社会に於いてスピリチュアルなものがさまざまな場で怪しげな形で流行しており、それだけに正しい対応の必要性を感じています。

コメントの挿入で、主題から外れたようになりましたが、要するにパウロが言う「キリストが信徒の中にある」とは、先に八木が示したとおりなのですが、それを分かりやすく言えば「キリストが私（信徒）の主体」となるとは、キリストが信徒の主体の場となる。

つまり、信徒の自我は自我のまま、その自我の場として自我を生かす創造的な大いなる命の働き（キリスト・神の支配）となる、ということだと言えます。そのとき、信徒の自我はそのままで、本来の自我へ真つ当な自我となるのです。そのような自我として生きる在り方を「私にとって生きることはキリストである」とパウロは言ったのです。（フィリピ一・二二）。この場合、勿論「キリスト」とは、対象的な実体ではなく「働き」としてどの人間にも本當の主体として創造的に躍動している根拠としての命その事とを述語として語られていることに注目することが大切です。もつと分かりやすく言えば、私と云う自我は、キリストなる大いなる命の働きの責任において「担がれて」いると云うことです。とすると、結局「信徒はキリストの内にいる」と云うのと「信徒の内にキリストがいる」というのは「究極的な主体が、自己の思いや計らいや努力とは無関係に自己に本來的存在を恵み与える、自己の存在の根拠・根柢なのである」と締めくくる八木の提示に私は共感します。

ここでコメントしておきたいことは「キリスト・神の支配・神」が、対象化され、客体化された名詞的なそれではなく、動詞的な「働きの場」として語られていることです。これは、イエスの場合に於いても同じであることに注目したいと思います。

さて、先に紹介しましたパウロのローマ人への手紙七章の告白に注目いたしましょう。古来、この七章の告白が、ユダヤ教徒時代の熱烈信仰者パウロ自身のことか、それとも、

キリスト者となったパウロの信仰者としての苦悩の告白なのか、とうことで論議されてきました。あなたは、どのようにこのパウロの告白を受け取られますか。

端的に言って、彼が七章全体で告白していることは、彼が復活のキリストから受け、開眼直覚した信仰の自覚内容の深さ、有り難さそのことであります。つまり、「信仰とは、福音とは、このようなことだったのか！。これこそが信仰の知恵というものなだ！、ということです。さらに、イエスが「神の支配」を証示なされたのは、この事だったのか！、と気づくのです。

結局、パウロは「自我の正体」に目覚めさせられたのです。自我の幻想に捕らわれ、振り回されていた自分に開眼させられたのです。そして、復活のキリストの命のリアリティを直覚開眼させられ、それまで自分が振り回られていた自我の亡霊が、つきもの“が自然に消えて無くなるように消滅してしまっただけです。強いてでもなく、強いられてでもなく、おのずからの自然の自分に、パウロは成っていたのです。そのように成った自分の信仰の場から、彼はロマの七章で告白しているのです。ですから、七章の最後で「私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」と、言ったのです。

以下、自我の働きと求道という観点から、七章に則して、彼が告白する内容の概要を見つてみることにします。

彼は七章四節から六節のところ、七章全体の告白の概要を最初に語ります。この箇所

を私の言葉で、つまり、翻訳ではなく、私のパウロ理解で記してみます。

—七章四節—

兄弟たち、あなたがたも、キリストの体をおおして、律法に対して死んだ者となつています。それは、あなた方が、他の方、つまり、死者の中から復活させられた方のものとなり、こうして、私たちが神に対して実を結ぶようになるためです。

わたしの愛する教友のみなさん。あなた方も、わたしと同じように、イエス・キリストの十字架の死と復活を通して証示された創造的な神の大いなる命の働きに、無条件に包まれて日々生かされている自分（エン・クリスト）に開眼なさいました。また、その大いなる命こそが本当の自分であること（クリスト・エン）にも気づいたのです。そのとき、あなた方は、「律法」を守ることが唯一神と人の前で正しく自分を生かすのだと思ひ込んでいた間違いに気づかされ、今まで、大切にしていた「律法」との関わり（律法主義・律法義認信仰）を、完全に捨ててしまいました。それは、神が、復活のキリストをとおして証示して下さった大いなる命に与かり（ギノマイ）、あなた方が、人として与えられている命を生き活きと生きる者となるためです。

—七章五節—

私たちが肉に従って生きていたときは、律法を介して起こる罪の欲情が、私た

ちの五体の内に働いて、私たちは死のために実を結んでいた。

私たちが、自我体の私を生きていたとき、自我体で律法と関わっていました。つまり、律法は私を正しく生かしてくれる尊いものだと思ひ込んでいたのです。ですから、律法を一生懸命に守り従うことで、神と人との前で義しい人と成るように励んで来ました（律法義認・律法主義信仰）。ところが、そのような律法に従って生きる信仰に、なんのこともか、最大の「罪」がひそんでいることに気づかされたのです。否、ひそんでいるどころか、「律法を守る」という努力そのことが、ますます自分を罪の深みへ陥れ、自分自身を殺し滅ぼしてしまう、恐ろしい事が起こっていたのです。

一体、律法と私たちとの関係で何が起こっていたのでしょうか。よくよくこの問題を見据えてみますと、「律法」が悪いのではなく、律法に関わる自分自身（自我体）に問題があるのだということが見えてきました。

例えば、律法が「むさぼるな」と言うとき、私たちは「そうだ！、そのとおり！」と、飛び着きます。なぜでしょうか。それは「この教えは、私を立派な人間に育て、変えて行くための、導い言葉である！素晴らしい教えだ！」と考えるからです。その結果、次々と律法の言葉を自分の中に蓄えて、その教で自我を肥大化して行こうと思ふのです。そのとき、律法はその人にとって、自分の導き手、自分の守り手、自分が頼れる主人となるのです。つまり、自我体としての自分を神と人との前に義人としてくれる究極の根拠であり自分の主体となってしまうのです。

たしかに、このような律法との関わりかたは、「誠実な生き方」「自分を無にして神の御言葉に従う生き方」、つまり「熱心な信仰者」に見えるのです。

しかし、もっと深くその生き方を見据えると、とんでもないものが見えてくる。

それは、単なる「自我が肥大しただけ」ということです。自我は限りなく自己肥大化を求め、拡大して行く性質をその内に秘めており、ただ自我目的と成る、これが「自我体」なのです。「自分は自分によって自分である」ということが自我（エゴ）です。自我体は、それが善であるか、悪であるかは問いません。自我を肥大化することのみを求めるだけです。「自我（エゴ）」とはそういうものなのです。

自我は自分を肥大化して行くためには、どのような事も利用します。勿論、愛も、神も、仏も、他人も、戦争も、信仰も、正義も、哀れみも、優しさも、自己犠牲も、宗教も、布教（伝道）も、祈りも、善行も、平和も、友人も、自分の先生も、後輩も、先輩も、親も、子供も、恋人も、妻も、夫も、自分自身も、勿論 地位も、名誉も、全世界も、宇宙も……この世のありとあらゆるものを、自己の肥大化（欲望満足）のために、当たり前のように利用するのです。否、利用する事ができるのが自我の正体です。「歪んだ自我」は徹底して非情です。魔的です。エロース（価値追求の愛）です。

このような自我は、「私はわたしによって私なのだ」から、その私の根拠・根柢は「私（エゴ）」なのです。私の主体は「私」なのです。ここに「私（エゴ）」という存在の不安定さがあるのです。なぜなら、「私」は決して完全では無いからです。だ

からこそ「私（エゴ）」は、常に何かを踏み台にして「私」を保ちつづけなければ「私（エゴ）」は維持できないのです。まさに、自我としての「私」は「律法餓鬼無限地獄」に陥ち込んでしまったのです。いつも誰かと比較し、勝っていれ高慢になり、他者を軽蔑して安心しなければ自我を維持できない。負ければ嫉妬し、攻撃非難することで自我満足する。その日々は、こころ休まることはないのです。この自我に縛られ、律法の奴隷となって走りつづけなければならぬ。その様態を「律法文字は、人を殺してしまう」のです。（コリントⅡ三・六）

このような「自我で抱え込んだ律法文字信仰」の实体は、「死のために実を結んだことに他ならなかったのです。

— 七章六節 —

しかし今は、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から開放されています。『靈』に従う新しい生き方で仕えるようになっていくのです。

しかし今は、律法を守るか否かに関係なく、このままの私を受け入れ、抱きかかえ、私の生きる根柢・根拠として創造的に躍動する大いなる命にある自分（エン・クリスト）を復活のキリスト（神の支配）を通して神が私に証示してくださいました。そればかりか、私の主体（クリスト・エン）となって、本来的な私へと促して下さることに開眼させていただいたのです。このようにして「律法」から完全に開放された今、

私はその靈的なキリスト（大いなる命）に促されて、この世の諸々のことがある現実の中で負けても勝ても、安心して生かされているそのままの自分ですごしています。

以上のパウロの告白で明らかになったことは「自我」の絶対化ということが、諸悪の根源であるということです。何度も言うとおり、自我の絶対化とは「私はわたしによって私である」ということです。それは自我主張であり、自我中心主義、人間中心主義の宣言です。その結果、自我充足、自我満足、自我完成こそが生きる目的になる。だから、その為にこの世のすべてを、手段とみなし無差別に食い荒らし、自我は肥大化して行き留まることを知らない。その恐るべき「自我の正体」をパウロは「律法を熱烈に遵守する」聖なる行いと確信していたその行為自体に於いて自覚化されたのです。

ですから、パウロの次の告白、「私はなんと惨めな人間なのでしよう。死に定められたこの体から、誰が私を救ってくれるでしょうか。」（ローマ七章二四節）は、律法を遵守しなければならぬのに、遵守出来ない自我の罪の嘆き、即ち自我の内面に於ける「意志と行為の矛盾の罪」の葛藤の告白ではなく、自分を義人としてくれる律法遵守に努力するその聖なる行為をしている自我が、ますます肥大化し、肥大化すればするほど、自我増長、即ち、だんだんいい気になって、人を見下したふるまいをする自分に成り、自我傲慢、即ち「偉いのは自分だけだと思おう自分」に変化し、自我慢心、即ち、おごり高ぶる自分になってゆく自分の姿に気づき、愕然とするのです。彼はそこに「罪」を見たのです。

この恐るべき歪んだ自我の正体にパウロが開眼出来たのは、単なる自己反省によってで

はなく、自我の善悪を越えて、自分を無条件に生かしている神の愛に開眼したからです。

そのとき、彼は叫んだ。「ああ！私は愚かなことをしていた。律法を守ることで義人となろうと熱烈求道していた。それが、なんのことか、ただの自我肥大化の肉行的な行為にすぎなかったとは！」このとき、パウロの自我は「真つ当な自我」になったのです。

律法義認の努力のことを、パウロは「肉の思い」と言いつた。「肉の思いは神に敵対することであり、自分を死へ導く」そして、「靈の思いは命と平和である」と彼は看破した。

(ローマ八・六)

「靈の思い」とは、自我の善悪に関係なく神の愛に無条件に包まれ、生かされている自分に開眼させられた自我の在り方のことです。そこでは、「善行が「出来る」とか「出来ない」という葛藤から開放され、神の内では、「ありのままの自分を淡々生きる」「平安と命に感謝する自我のことです。そのような自我を「真つ当な自我」と言い、そのような在り方に開眼することを「信仰」というのです。このすべてが「靈の思い」です。

それでも、人は言います。「それでいいのですか？」と。あなたは、いつまで自我にかじりつき、捕らわれているのです。出来る！出来ない！善だ！悪だ！と、イイ、カッコをしたがる、それが傲慢ということなのです。それが「肉の思い」です。

「肉の思い」の固まりである「歪んだ自我」こそ、エゴイズムの極致です。それが「神に敵対する」ということです。

では、なぜ、「肉の思いは死であり、神に敵対すること」なのでしょう。そして「靈の思い」が、なぜ「命と平安」なのでしょう。その理由は、人間の生の現実にかいて、

簡單明瞭な事実なのですが、その命の眞実に開眼していない、また、開眼出来ないから見えただけです。この命の眞実とは何なのでしょうか。これについて、もう少しイエスの信仰に則して考えてみましょう。

人間は、そして万物はすべて、相互の関わりの中でのみ生きるようにに在らしめられています。これは、神の大決定であり、創造に於ける自然なのです。その事実をイエスは「神の支配の働き」と提示なさり、パウロは「復活のキリスト」に於いて直覚させられた。

「神の支配の働き」は「命の秘儀」です。それは命の奥義であり、命の神秘です。マタイは「天の国の秘密」マルコは「神の国の秘密」と新共同訳聖書は訳している。秘儀・奥義・秘密・神秘という言葉はすべて「目または口を閉じる」という内容の言葉（ムステリオン）の訳である。つまり、それは人間が目で見たり、口で言葉したり出来ない、それは自我の能力を超越している世界であるということです。その意味からいうと「神秘」と訳すのがよいのではと思います。

たしかに、この世に存在するすべてのものは、相互の関わりの中で存在しています。この神秘について、パウロは次のように言う。直訳すると、

兄弟達よ！ 私は、あなた方がこの神秘について、知らないでいることを、わたしはのぞまない。

—ロ—マ十一章二五節—

どんなことがあっても、是非！是非！「この神秘」を知って欲しいのです。とパウロは

人々に懇願するのです。マルコ福音書では、この神秘についてイエスが次のように語られたと記している。

十二人の弟子と一緒にイエスのまわりにいた者達に言われた。「あなたがたには神の支配の神秘が（すでに）与えられている。しかし、他の者たちには譬えでそのすべてが示される。それは、彼らは見るには見るが、認めない。聞くには聞くが、理解できない……」

—マルコ福音書四章十節〜十二節—

その神秘とは、先にも言いましたとおり、「万物は、相互の関わりに於いて生かされている」という神の大決定の事実のことです。だのに、なぜこの単純な事実が「神秘」と言わなければならないのか。イエスは言われた、「人々は、その事実を見ても見ず。聞いても聞かず」と。もし「私は分かっている」というなら、イエスは言われるだろう。「分かっている」とあなたが言うところに、あなたの罪がある。（それが肉の思いである）」と。

（ヨハネ福音書九・四一）

万物はすべて、互いの関わりのもとで生かされてるといふ、その内実はどのようになっているのでしょうか。その手ががりとして、「個」と「多」との関係で反性的に少し掘り下げておましよう。

万物は単なる「個」の集合体の「多」ではありません。そのような多はバラバラの多であって、他に対して全く無関係、無関心であり、厳密な意味でそこには「個」も「多」も

無いのも同然となります。ここでは「個」も「多」も存在することは出来ず、死に絶えてしまいます。人体に例えるなら、人間は個々の臓器のただの集合体では、生体としての身体は存在出来ません。なぜなら、胃だけ、腸だけ、心臓だけが互いに関係なくあるのは、多として臓器が合ったとしても身体にはなりません。個々の臓器が互いに関わりあって、それぞれが機能しているそこに身体として活動ができるのですから。

また、「個」が互いの利益を得るための「多」でもありません。個々の「個」が、互いに自己主張をして、他を自分ためにだけ利用しようとするための「多」なら、その多の場は我（エゴ）が渦巻き、争いと混乱とが生じて、結局「個」も「多」も壊滅してしまうでしょう。人体に例えるなら、胃や腸や心臓が「自己目的」にのみ働き他をその為だけに関わるなら、身体は忽ち健康を損ねる事になります。癌はそのような存在ではないでしょうか。

また、「個」が「多」に呑み込まれてしまうなら、そのものは真の「個」ではなくなります。「多」がない「個」は現実には存在できません。人体でいうなら、目も腸も心臓も体すべてか「多」のためにだけあるなら、「個」としての特徴や機能がそがいされてしまいます。「個」の喪失は「多」の意味を失います。

さらに、「多」が「個」に呑み込まれてしまうならどのようなようになるでしょうか。「個」があつて「多」なのでから、「個」の無い「多」など、もはや「多」ではありません。人体でいうなら、胃も腸も心臓も……同じ働きをするなら、胃や腸や心臓が無いのも同然です。そんな身体はありません。（コリント一・一二・二六参照）　ここで明確に

なることは、相互の関係とは、相互内在である“ということ”です。

これらの事を「数珠」で説明しましょう。数珠はご存知のとおり数珠玉の中心に穴を開け、一本の糸を通して一つにしたものです。勿論、ロザリオでも同じですが。数珠は一〇八個、又、五十四個、又二十七個の玉で一つの輪に造られています。ロザリオは五十個の玉がつなぎ合わされて造られています。それらの玉は、玉の中心に通っている一本の糸によって一つの輪として、その役割をはたしています。しかし、その糸が切れれば、忽ち玉はバラバラに散乱してしまいます。中心に通る糸が個々の玉を繋いでいるのですから。その場合、個々の玉は、「個」である事を保ちながら「多」として、一本の念珠としての役割をはたしているのです。その意味でロザリオも数珠も、「一即多」「個即多」としてあるとき、数珠としてロザリオとしての本来のものと成り、その役割を達成するものと成るのです。

そこで、さきに述べました「個」と「多」との関係で数珠やロザリオを考えると、大切なのは糸です。糸が無くバラバラの「個」を集めて圧縮し、一つの大きな玉にしてしまふなら、それでは「個」が無くなり「多」も無くなり、数珠には成りません。だといってバラバラに成った「個」の集まりだけでは、数珠でなくなりません。「個」としての玉を損なうこと無く同時に「多」として一本の数珠であるためには、どうすればよいのでしょうか。それは個々の玉に糸を通すことです。そうすると、自然に一本の数珠に成るのです。

この出来事を厳密に言えば、糸を通して個が個と成るときに、多（全体）が多（全体）として自然に成り立つ、ということ。そのような「個」と「多」との関係を「個即多」

又は「一即多」、「個即全体」というのです。

以上の事柄は大切なことを示唆しています。何となれば、万物の關係に於いて、その關係を安定させ、それぞれをそれぞれ足らしめ、一つのまとまりとして自然に成り立たせる働きをしているのが、イエスが提示した「神の支配」の働きであり、パウロがイエスの復活顯現体験で開眼させられた「創造的な大いなる命（キリヒスト）」なのです。それが「神秘・秘儀・奥義」なのです。

以下もう少しイエスの提示に耳を傾けてみましょう。そのためにヨハネ福音書八章の一つの物語を見ることにします。

イエスが神殿の境内にはいられると、民衆が皆、ご自分のところに行って来たので座って教え始められた。そこへ律法学者達やファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何かを書きはじめられた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で、罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかがめて地面に書きつづけられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとり」と、

真ん中にいた女が残った。イエスは身を起こして言われた。「婦人よ、あの人達はどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が「主よ、だれも」と言ううと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからもう罪を犯してはならない」

—ヨハネ福音書八章二節—十一節—

この話を聞き、皆さんはどのように感じられましたか。もし、何か変だ？と感じられたなら、物語のどこに、また、何に、それを感じたのでしょうか。勿論、ヨハネ福音書の編集者ヨハネがこの物語を載せたのは、それなりに意図があったからです。しかし、今は、そのことについては深く問わないで、何か変だ？では、何が変なのかという点について、素朴に感じたことを考えてみたいのです。

この物語に登場する人達は、イエス、ファリサイ人、律法学者、姦通の場で逮捕された女です。これらの方々はそれぞれに自分の生きる立場をもっています。そしてこの物語の中心は、一人の女の所行を巡って、その女への関わりかた、対処の仕方についてイエスとファリサイ・律法学者との対応の仕方が語られています。

ファリサイ人と律法学者たちは、旧約聖書のモーセ五書を絶対的神的権威として律法に基づいて女を裁こうとする立場です。それに対してイエスはどういう立場だったのでしょうか。一口に言えば、イエスには立場など無いのです。つまり、旧約聖書やモーセと言う歴史的なこの世の相対的なもの一切には、基づかず、依存もせず、ただ、素朴に世界に満ち満ちている創造的な命、すなわち天然自然（神の支配の働き）に則して、すべてに関わ

り素直に生き、そこから発語なさっているだけです。皆さん。このイエスの視点はとても大切です。イエスはこの世の出来事のいたなるものをも、自分の生きる究極の拠り所とはなされなかった。旧約聖書もモーセにもイエスは依りすがらない。マタイ五・二一以下のイエスのアンテテゼがそれである。またパウロも「肉のイエスは私は知らん」と言いました。(コリントⅡ五・一六。一〇・三)

ということを知るとき、私たちがこの出来事に対して「何か変だ？」と感じた、その一点が、理屈抜きに、むしろ人間としての自分自身の存在の深いところからおのずと生ずる「変だぞ・変ではないか？」だったのではと気づくのです。と同時に、フアリサイ人達に感じることは、「なにやら、力みすぎている」「何かに振り回られている」「何かに偏りかすぎている」「つまり「不自然さを感じた」、それが「なにか変だ」ということだったのをではないか。そこで、以上のことを前提にして、もう少しこのことに注目してみましよう。

フアリサイ派等に対して「なにか変だ？」と感じたそれを、一口でいうなら「統一化現象」と言えます。統一とは「ふぞろいものを、一つのまとまりあるものにする」ことです。その意味では「統一」ということは悪ではありません。たとえば、一つの目的のために家族全員が力を合わせて働き努力することは善いことですし、ときとして必要です。しかし、誰か一人の者が立てた目的の為に、有無を言わさず強制的に働かさせられる、それに従わない者は処刑してしまうというような「統一」であるなら、その統一は「悪」です。必ず悲劇を生みます。全体主義・独裁主義です。そして、この世の何かを絶対の真理

と固く信じて、それで統一する場合も同じです。

「統一」という働きをする代表的なもの、それは人間の理性です。それを基本にして自我は統一に努力します。これは、善悪のことではなく、理性や自我はそういうものなのだということを、よくよく心得ておくことは大切です。

結局、フアリサイ派等の場合、モーセの律法を神の絶対的な命令言語として理解し、女を逮捕したのです。彼らにとっては、それは神の行為なのです。当然の神聖な行いであり絶対的な正義なのです。そのとき、行っている者自身が神（律法）と同一になっているのです。ここに統一化現象の恐ろしさがあるのです。

その人の知性も感情も意志もすべて神（律法）と同一化した自我によって統一されてしまふとき、人間は人間としての本来性を失い狂うのです。例えば恋人を神の如くに絶対化した者は、恋人に自分の全存在を支配され、支配されることを最善と感じます。そのとき、誰が何を言っても聞き入れません。しかし、その恋人がただの男であり、ただの女であったことに覚めるとき、つまり相対化されるとき、自分の異常さが分かります。異常さの内容は、没個人（自分自身と相手自身）とを見失う。没隣人（他者に対する関心を失う）。没社会（社会の秩序や常識が無くした）自分だったことに気づくのです。そこから、本当の美しい恋が開花するのではないのでしょうか。このような現象は、過激なイスラム教徒による自爆テロ現象に、如実に現れていることは我々が承知のことです。

自我による統一化はエゴイズムの極致です。人間として血も涙も無くなってしまふのです。ですから、当然の如く、女を逮捕し、石打刑の残酷な殺害を行う事を求めてくるので

す。しかも、彼らの本当のターゲットは、自分たちと同じように律法文字を守らないイエスにあり、その為に女を道具のように利用する歪んだ自我の狡猾さに、私たちは「褒だ！」と感じるのではないのでしょうか。

イエスはどうかだったのでしょうか。イエスは聖書（律法）から出発なさらなかった。それは聖書（律法）を直接神格化しなかった、ということ。なぜか。イエスは聖書（律法）と神とを横並びにイコールで結ぶことをしない。この視点は基本的な重要事である。神も聖書（律法）も、この相対の世界に下ろしてきて、そこでどちらも絶対化するからです。その行為を「偶像にする」ということです。他宗教を偶像宗教と軽蔑誹謗する当のフアリサイ派等が、自ら偶像崇拜を行っている。（今日のキリスト教会も基本的には同じである）

神と聖書（律法）との関係は、この世での横並びのイコールではない。その関係は縦並び、天と地・上と下・顕在的世界と超越の世界との相互内在の関係なのです。しかも、それは、先に述べた如く、滝沢氏がみごとに指摘したとおり「不可逆」の関係なのです。（これに関してはここで詳しく述べられませんが）と言ふことは、律法（聖書）は、超越の世界即ち神の支配の働きのしるし、その創造的な命のたぎりを証示した言語なのです。この事は「イエス・キリスト論」に於いて根本的な大事であることを承知しておいていただきたいと思います。

とにかく、律法に対するイエスのこの視点を理解できなかったフアリサイ派等は、イエスが律法（聖書）を否定したということと十字架刑で惨殺した。それは、彼らにとって、

は、聖なる行為、悪魔に対する勝利の証だったので。しかし、イエスは彼らに言われた。

私が来たのは、律法や預言者を廃止するためだと、思ってはならない。廃止するた
めではなく、完成（目的に叶うように）するためである」（マタイ五・一七）と。

イエスは、律法（聖書）が生み出されて来た根拠・根拠に立っておられた。この世に生
み出された「もの」は相対的なものであって、決して絶対的なそれではない。にも関わら
ず、相対的な「もの」と絶対的な「もの」とを横並びに同一化することは、所詮すべてを
相対的なこの世に抱え込んでしまうことであり、それを「絶対化」することは、偶像化す
ることです。その意味で聖書（律法）は、絶対の世界の「しるし・証示」なのであって、
それ自体が神なのではない。（聖書原理はその誤りを固持することで、唯一絶対排他的独
善宗教になり、身動き出来ない宗教になってしまった。まさに、女と対峙しているフアリ
サイ派のようになったのです。）

イエスは、この世のものが二つに分かれて相対して在る「相対の世界」が未だ無く、個
が相互に内在して一つである「絶対の世界」に促され自覚的に生きておられた。それを「
愛」といいます。

いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわ
たしたちの内に留まって下さり、神の愛がわたしたちの内で完成されるのです。

(神)をお示し下さい」と願ったフィリポに「フィリポよ、わたしを見た者は父(神)を見たのだ、わたしは父(神)の内(エン)にあり、父(神)がわたしの内(エン)におられることを信じないのか。」と答えられた。また、「わたしと父(神)とは一つである」と言われた。(ヨハネ福音書一四・九〜十一。一〇・三〇)

★注・「神がわたし内(エン)におられる」のエンについては、先に述べたが、ここで再度記しておきます。それは、イエスという存在があり、さらにもう一つの存在である神がイエスの内にいる、ということではない。また、イエスに神が憑依(ひょうい)する、つまり、イエスに「神がのりうつる」ということでもない。そうではなく「内におる(エン)とは、「神がイエスの内に働く」ということ、「神がそのものに満ちている」といふことを言う。(ギリシャ語新約聖書者クギ辞典 ハルトツ／GZシュナイダー編) 内(エン)とは、この場合イエスが神に包まれ、神の働きの領域内に置かれていることであり、神に支えられ、神がそのものの根柢であること、さらに言えば神がそのものの主体となっておられることを示す。ですからイエスは神との関係性をヨハネ福音書に於いて次のように提示しておられる。「私は自分勝手に語ったのではなく、私をお遣わしになった父(神)が私の言うべきことを、お命じになった(委託された)からである」(ヨハネ福音書一二・四九)とある。 — 「宗教と人生」(二) 一四〇ページ・松下昌義 —

★注・ここで、ついでながら申し添えておきますと。イエスが提示された「丘の上の教

え」はこの世の相對の世界に於ける倫理ではなく、絶対の世界“つまり、この世の根柢・根柢の場、即ち「創造に於ける人間の自然（本來的な在り方の定め）」からの發語なので、それは人間のあるべき理想的な道徳や倫理の提示ではない。理想とは、相對的なこの世の自我が造りだす単なる理念だからです。そうではなく、そうあることによつてしか、存在が存在としてあり得ない創造（神）に於ける人間の自然（大決定）“。存在の根柢・根柢としての命のたぎりの場の提示なのです。「ああ！そうだったのか！」という創造の神秘・神の支配への開眼の促しなのであります。それをこの世の相對の世界（自我の世界）に持ち込んで律法化し「行えるか否か」と議論することは、歪んだ自我が生み出す虚構であり、それは、行ふも不可、行えないのも不可、所詮は自我の世界での「聖書ごっこ」キリスト教ごっこ”にしかすぎない。そねれは最後にニスリズムで終わる。

話をもとに戻そう。フアリサイ派等らが逮捕してイエスの前に引きずって来た女と對峙されたイエスの基本的な姿勢は、神の支配の促しによる「天然自然」でした。わたしは、それを「創造に於ける人間の自然」と申しています。

天然自然は、親鸞が教行信証で説く「天の然からしむるところを自ずから然る」という所謂「自然法爾」のことです。「自然」については、二十六年ほど前に記しました拙著「自我の向こう側」三六ページで少し説明しておきました。お読みいただければさいわいです。

とにかく「天然自然」をイエスの信仰との關係でいうならば、天とは神です。おのずと

然らしむることです。それは「創造」という、神（大いなる命）の成る“です。自然とはおのずと本来の創造の定めへ成ることです。その本来の創造の定めにより、つまり人が自分の主体の働きに、促されてそのように現し生きる、ということと成る。その場合、天然自然は「天の然らしめるところを、おのずから然る。を、天の然らしめるところを、自ら然らしめる」という主体の自覚面を言うのです。この人間の決定の本来の在り方を「創造に於ける人間の自然」と私は言い表したのです。それは、結局、神の支配の働きとしての大いなる命の「場」なのです。神が在って、神が働くときに場が自然に現成するのではなく、働くその場事態が神であり「場」なのです。この点について有賀鉄太郎氏はその古典的名著「キリスト教に於ける存在論の問題」で、旧約聖書出エジプト記三・一四でモ―セに対して神が「『わたしはある。わたしはある。』という者だ」と言われた。ではその「ある」とは何かについて、「それはただ『有るところのもの』ではなく『ハ―ヤー』したところのもの」として有るものである。そして「ヘブライ語では『成る』とか『生起する』ことを離れた『有る』は考えられない」そして彼は言う「『成る』と『有る』とが一如に考えられていることに注目したい」という。（有賀鉄太郎著作集4「有とハ―ヤー」）

ここでしっかりとつかんでいただきたいことは、神が有る“ということは、相対の世界で言うところの、対象的、且つ客観的、即ち主体・客体関係に於けるような、有る“ではなく、在る・無しを超越した「有ると成る」とが「一如」その事なのだ、いうのである。これを私は「創造的な大いなる命のたぎり」と言表したのである。

四十二ページ 四行目以下欠落部分

(四十五行目抹消 四十六行目に続く)

イエスはそれ事態を「お父さん」と言われた。そしてその“成る・有る”の大きい命のたぎりを「神の支配の働き」と直覚なされ、その命（ロゴス）が天地を包み、同時に天地に於いて“しるし”として証示され、イエスに受肉し「新約聖書で「キリスト」と称されイエスはみずから、それを肉体に於いて行じられたのです。（ヨハネ福音書一章）

ここで、繰り返しのようになるが、以上述べた内容に新しさを加えて言うと、「成る・有る」というヘブライ的な大いなる命に促されるとは「応答」を求める性格を持つ自覚的な行為であるという意味で、その関係は神と人との人格関係で語られ、当然その形は神を対象化したようになる。それが、神を「お父さん」と呼ぶ人格関係的な表現です。一方キリスト（大いなる命）の中に支え包まれてあると言うときのそれは「場」となる。それをよく譬えられるように磁場に置かれた軟鉄が磁気をおびて磁場と一つになるように、人と神との関係に比して人と神とは個々であるが一なのだと言われる。その関係はいずれにしても「相互内在」なのです。そして、それ自体は人為ではなく「天然自然」なのです。

律法を絶対的な基準にして、「あれか！これか！」と力み詰め寄るエロース的（価値追的）なフアリサイ人達に対してイエスの姿勢は天然自然その者となつて、天然自然を行じ証示された。これが「私を見たものは神をみたのだ」とイエスが言う意味です。

天然自然の動的内容の「有る・成る」その場は「相互内在」であり、その構造は「自然な愛」（アガペー）です。それを、「あなたがたが、互いに愛するところに神がある」とヨハネの手紙はいう。ですから、「その愛」とは、人の側から倫理や道徳として、さらに、「人間としてそうあるべき」理念ではない。「当為」（ゾウレン）ではない。元始からあるからある、神の支配の働きのなる命のたぎり、キリスト・ロコズであり、相互内在であり、大いなる愛（アガペー）である。ですから、ヨハネの手紙は次のように提示する。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛した。ここに愛がある。愛する者たち、神がこのように私たちを愛して下さるのだから、私たちも互いに愛し合うべきです

—ヨハネの手紙Ⅰ四章一〇節—

これこそ、一即多。多即一。限界点即自由。エン・クリスト。クリスト・エン。創造的な大いなる命のたぎり。創造に於ける自然。天然自然。神の支配の働き。キリスト。等と言ひ表される「神秘・奥義」なのであります。

だからこそ、イエスの女に対する関わりには無理がないのだ。言うならば、そこには教義はない。理屈がない、どのような計らいもない、スツカラカンのスツカラカン、掴みどころがない。謙虚も傲慢もない。始めからありつづける命があるからある、というだけです。この神秘・奥義をヨハネは見事にヨハネ福音書の冒頭で証示しました。

始めに言葉（ロゴス）があった。ロゴスは神と共にあった。ロゴスは神であった。このロゴスは、初めにかみと共にあった。万物はロゴスによんで成った。成ったもので、ロゴスによらずに成ったものは何一つなかった。ロゴスの内に命があった、命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

—ヨハネ福音書一章一節—五節—

イエスはそれ事態を「お父さん」と言われた。そしてその「成る・有る」の大きい命のたぎりを「神の支配の働き」と直覚なされ、その命（ロゴス）が天地を包み、同時に天地に於いて「しるし」として証示され、イエスに受肉し 新約聖書で「キリスト」と称されイエスは必ずしも肉体に於いて行じられたのです。（ヨハネ福音書一章）
どさろがない。謙虚も傲慢もない。始めからありつづける命があるからである、というだけ。

イエスはファリサイ派の人達に言われた。「罪を犯したことの無い者が、この女に石を持って打て」と。すると、誰もいなくなった。イエスは言われた、「私も あなたを罪に定めない。さあ行きなさい。今からは罪を犯してはなりません。」と。

イエスはただヒューマニステイックに女を赦したのでありません。イエスの赦は願いなのです。神の支配の働きが、即ち創造的な大いなる命をイエスは女に投げかけたのです。同時にそれはファリサイ派等の人達にも同じく投げかけたのが「罪を犯した事のない者から石で打て」という言葉の中身ではないだろうか。

ファリサイ派等の人達は、イエスの言葉を聞いて「自分のうしろめたさ」を感じて去ったではありません。ましてや、完全な神の子イエスだけが、女の罪を赦す事が出来る方だから、女を赦したのではない。

イエスにとって、律法に準じているか否かと言うことが罪ではない。神の支配の働きに開眼し、それに促されて主体的に生きようとしているか否かが問題なのです。イエスはファリサイ達に言われた。「見えてなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、

今、あなたたちは『私たちは見える』と言う、そこにあなた達の罪はあなたたちのなかに住み着いている』（ヨハネ福音書九・四一）　ここで「見える」という言葉の意味は、特にヨハネ福音書では視覚的な見えるではなく、神の支配の働き・神の創造的な命のたぎり神の秘儀としての命の根柢・キリストに抱きかかえ支えられ、同時に、自分の究極の主体となつて自分を担っている絶対的な根柢・根柢その事に開眼していることを言うのです。その意味で「見える」とは、自我によつてではなく「靈的な悟り」のことです。ということ、
「天の然り」を自我で抱え込んで、自分勝手に悟つたと思ひ込む、つまり「私は見える」というその自我主張に罪があると、イエスは指摘なさつたのです。ですから、イエスはユダヤ教のラビ（教師）ニコデモに言われた。

ニコデモよ！　はっきり言っておく。人は、新たに（上から・根柢から・霊から）生まれなければ、神の支配の働きを見る（悟る）事は出来ないのです。

—ヨハネ福音書三章三節—

結局、フアリサイ派の人達には、イエスの提示は通じなかつたようです。それは、神と人とが横並びで繋がり、縦の不可分・不可同・不可逆の相互内在的に繋がっていないまま、神も聖書も自我で抱え込むだけで満足する、虚構の信仰から抜け出る事ができなかったからです。一方、女はどうなつたでしょうか。それは分かりません。今、この物語を目にする私たちは、どうでしょうか。

以上、「イエスとは何か」という主題で、序論も含めて私流に、ドラドラと散文的に語って来たのですが、そのドラドラが正しく止まることが出来ず、途中で時間切れになった文章になり、「つづきは、次にいたします」というようなかたちになってしまいました。これは、私の愚かさの結果であって、「馬鹿は死ななきゃならぬ」と愚かを自認して居直っているしです。おゆるしを願う次第です。

ここで述べさせていただいたことは、私がすでに記した四十数冊の手作り冊子において記した事ばかりで、特に新しさはないとおもいます。が、それでも、少しづつ、その言葉が私なりに深化して行っているのではと、ひとりですべて思っています。その中でも、「神理解」が、「場所論的」に少しは自分の求道の器量に応じて、自覚的に出来るようになったのではないかと思っております。

「場所論的神理解」と言えば近代日本の哲学者の代表者とも言われる西田幾太郎氏が、長年の思索と求道の末、ついに一九四五年六月に死去なさる二ヶ月前に完了したと言われる「場所的論理と宗教的世界観」を思い出します。(西田幾太郎全集 第十一卷)

彼が最後に到達したと言われる「神理解」は、今や再び多くのその道の学究者ばかりか日本を越えた神学者にも共感と触発を及ぼしつつあります。専門家でもない私がなぜこのような事をもうしあげるのかと申しますのは、私の器量で私なりに自称イエスの弟子だけでありたいと願いつつ、信仰の求道が続けてまいりまして、当然のように行き着いた「神理解」が「場所論的」なそれであったからです。勿論、西田のように深く専門的な思索探究においてではなく、素朴にそのように直覚ささせていただき、すべてのしがらみから開

放させて頂いたのです。「もはや、われ 生きるにあらず、キリスト（大いなる命）が、わが内にいきるなり」と、自分のそのままで、生かしてただける、有り難さで日々すごしているからです。そして、その大いなる命を分かち合えるご縁のある方と、淡々と、しみじみと、語り合い、分かち合い、喜び、たいと願っています。

それにいたしましても、五十一年の間の求道で、イエスから学ばせて頂いたことは、神の支配の働きということでした。それを上記で、述べましたとおり「天然自然」ということであるとすると、そして人間の、世界の根柢がその大いなる命のたぎりであり、その働きが全ての人と神、人と人との相互内在の関係、つまり愛という姿で個（一）即多であるなら、その現れが教会（エクレシア）なのだとして了解できたのです。それはまさに「天然自然」なのであり、その在り方をパウロが語った次の言葉にみたのです。

各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、信仰においてこうしようところ

きめたとおりにしなさい。

—コリントⅡ九・七一—

そこで、当時、身をおいでしました左京教会をそのようなエクレシアと成させた給へと祈り願いながら、一つの実践をさせていただいたのです。（ペテロの手紙五章二節以下）一人ひとりの教友を聖霊様は、招き集めてくださり、大いなる命の糸が個々の玉を結びあわせるように、小さいながらも有り難いエクレシアにさせていただいたことを、退任した今も感謝しています。「あごらの集い」もそのようなエクレシアとなりますように、聖霊さまのお支えを皆様とともに求めてまよりたいと願っています。

有り難うございました 合掌